

発のきっかけとなった。

この時期、一月三十日は、故孝明帝の十年祭にあたるため、天皇は京都御所にあり、政府の要人も、大久保を東京に残して、殆どの要人は京都に下っていた。

大久保は、二月三日の午後、海軍省に入った電報によつて、この変事を知らされた。

血気にはやる若い党員の暴発は、桐野や篠原等に命ぜられたものでもなく、全くの暴挙で、西郷とても知るよしもなかった。

西郷は丁度この頃、大隅半島の高山で狩猟中であつたが、この知らせを聞いて、

「わがこと終る」と、嘆息したと伝えられている。

西郷は直ちに下山して、五日・六日と私学校本部で今後の方針を討議するが、若い党員が勝手に突つ走つたとはいえ、まんまと政府の挑発に乗つた形となり、両者の正面衝突が避けられない今、西郷も彼等を見捨てるわけにはいかなかった。

折りにふれて 岩田トヨ子

(会員・佐伯市長良)

山々も谷も昔にかわらぬに流るる水の無きを悲しむ

溪谷を流れ落ちいし滝つばに今は水なく昔をなつかしむ

つばくろは何を思いてまいもどる巢にいるひなに心残るか

パスの窓緋の帯の如き彼岸花しばしのあいだ我を忘るる

洞門に今に残りしのみのおと禅海のつちの音聞ゆるがごとく

みぎひだり奇岩奇峯は紅のただひと色に染まりおりけり

肥料やれど寒さ厳しく秋なすの堅くなりしをとりてくやめり

年ふりし梅に一枝咲きおれり神の恵のいのち尊し